序

現在，科学技術は世界を支配しているように見える．人間の日常生活では，それにどれだけ依存しているかで，先進国であるか，そうでないか，富んでいるか富んでいないかが決まる．国防においては，まさに，熾烈な先頭争いがそこに行われているのであって，国際政治上の力関係が科学技術によって左右されている観がある．

そして，そのような科学技術は，一般の人の容易に近づくことのできない水準になっており，従ってそれを駆使する一部テクノクラートは，現代社会で端倪すべからざるエリート階級となっている．

しかしそういうことになったのは，17世紀の科学革命以後，工学の名のもとに，科学と技術が密接に結びつけられてからのことである．それ以前は，技術者は決して社会の上流に位する者ではなかった．

ギリシャ時代，天文学，数学，弁証法等，頭脳を使って宇宙を観照する哲学は，社会の支配者側に立つ者のすることであり，航海術，耕作術，機械術等，肉体の延長上にある技術は，奴隷のする仕事であった．

勿論，当時の技術は，その社会に不可欠のものであったろうが，ともかく下にあって奉仕する立場であったのである．

今は貴族も奴隷もない世の中である．そこで科学者と結びついた技術者が，自ら貴族と意識するようなことがあってはなるまいと思う．階級としての奴隷はなくなっても，技術が世に奉仕するものであることには変りはない．

技術の研究に従事する者は，研究室で身を持すに貴族としての誇り，哲学者としての厳格さをもってするが，その成果を持って外へ出るときは奉仕者としての心でなければならない．

そうすれば，今世にあるさまざまの科学技術に対する批判にも，応えて行けるのではないかと思う．

1979年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士　烏　田　専　右